

伊野川から忠別川までの地名③1

忠別太は鮭場所

前回は、幕末に旭川を踏査した、近藤重蔵、間宮林蔵、松浦武四郎が、忠別川のアイヌ語名を「チユクベツ」と表記したことを紹介した。これは、チユク・ペツ(cuk-pet 秋・川)の意味で、秋になるとチユクチェプ(cuk-cep 秋・魚↓鮭)が盛んに上る川であるところから命名された川名である。

右のチユク・ペツ(cuk-pet 秋・川)説を明らかにしたのは、アイヌ語地名

研究家の山田秀三(ひでさう)である。山田秀三は、『北海道の地名』(昭和五十九年刊)で、「忠別太(ぶと)putu 川口。ここでは、石狩川との合流点)は鮭場所」と書いた。山田秀三は、当時公刊されていた松浦武四郎の資料を中心に、忠別川のアイヌ語名を右のように究明した

のである。松浦武四郎より五十年前の近藤重蔵や、四十年前の間宮林蔵の資料まででは見ることはできなかったが、見事に本質を喝破したのである。

明治二十六年から旭川に住み、昭和二十八年に旭川文化賞を受賞した郷土史研究家の斎藤讓三は、松浦武四郎が安政五年に十勝越えをした時に、石狩から旭川まで同行した石川タカラコレからの伝聞として、写真①の地図の「フシユコチュプ・ペツ(husko-cup-pet 古い・忠別川↓現・ポン川)くらいまで、忠別川は丸木舟が通い、晩秋になると、鮭群の遡上で、川水はナマ臭くて飲めなかった」と述べたと記録

している。また山狩にも恵まれている。忠別川清流は魚族が豊かで、殊に鮭の遡上が多かったと、伏古忠別(註・現在の旭神町)居住のタカラコレアイヌは語っている。



写真② 第32回 カムイチェプノミ
【昭和三十年、「郷土のむかし」】このような記録が残るほど、忠別川は、鮭の遡上が多かった

また山狩は、牛朱別は、「鹿の蹄跡道」ともいわれ、春から鹿の群を忠別川の対岸の神楽岡山裾に追い込んで捕らえ、晩秋の漁季になると、川を覆う鮭の大群を冬季の食料として貯うべく、ルイベ(凍り干)や燻製づくりに、暗夜を破る松火の下に、老幼男女は徹宵し、黎明の朝日は川面に映り、その閃めく美しさは、年毎に大漁の謳歌とともに、その景観が、自然に地名となったと伝えられている。

斎藤讓三は、右の「郷土のむかし」の最後に(第十九回)、「旭川の語源」と題して、次のように記述して結びとしている。少し長い内容であるが、紹介して結びとしたい。

石狩、忠別、美瑛の三川合流点に発祥した旭川地名を考えると、漁利によって名付けられたことは、古老の話で総合してそれとうなずかれる。もち論、山狩にも恵まれている。忠別川清流は魚族が豊かで、殊に鮭の遡上が多かったと、伏古忠別(註・現在の旭神町)居住のタカラコレアイヌは語っている。

斎藤讓三は、「旭川の語源」を、「忠別川が鮭の豊漁川である」と理解しながらも、川名のアイヌ語名が、チユク・ペツ(cuk-pet 秋・川)であることまでは、解釈できなかったことが判明する。

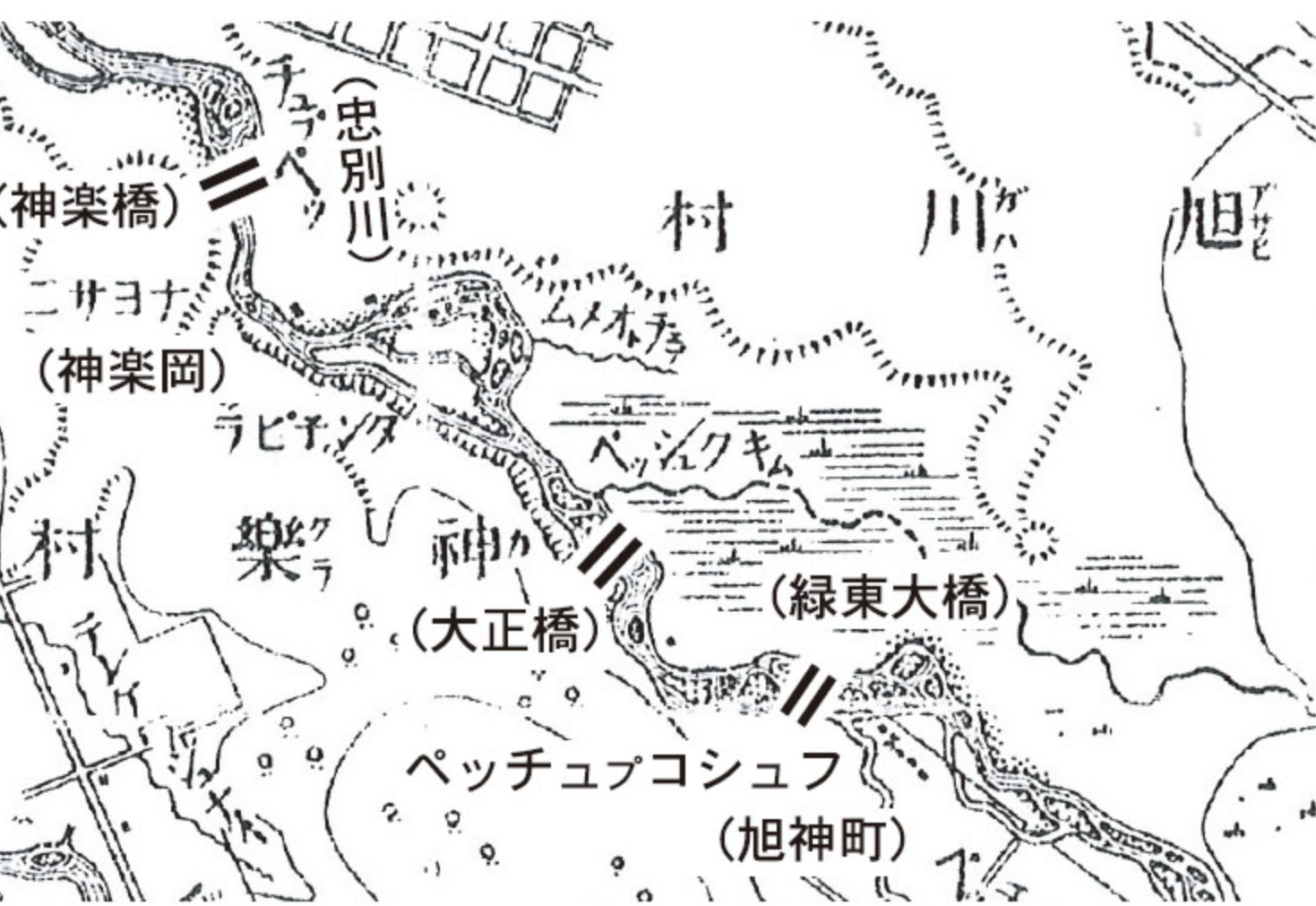
西部、忠別太から旭川市部忠別を経て、伏古忠別(旧忠別)から、今の上川郡東川村 西部に一連して好個の漁場で、大忠別をなしていた。

写真②は、九月二十八日(土)に、神楽岡公園で行われた「石狩川を野生のサケのふるさとに! 第三十二回カムイチェプノミ」である。これは、忠別川に最もふさわしい儀式である。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

142

高橋 基



写真① 明治31年製版『北海道仮製五万分一図』

※毎月第1週号に掲載します
(アイヌ語地名研究会幹事)